



筑紫女学園大学リポジット

A Categorical Approach to Periphrastic Causative Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/533

迂言的使役構文とカテゴリー

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Periphrastic Causative Constructions

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿では迂言的使役構文、make/have/let/get/cause + 目的語 + (to)do を考察する。ここでは2つ視点を置く。一つは存在の概念から、使役文を考察する。存在とは、ある場所に何かが存在することを意味する。その存在には、もとからその場所に存在する場合と、他の場所から移動してきたり、新たに出現することで、結果として存在することになる場合がある。前者を〈存在〉、後者を〈出現〉とすれば、迂言的使役構文はすべて、被使役事象またはその一部が〈出現〉することを表す構文であると主張する。

二つめは上で述べた〈出現〉を、カテゴリースキーマで表記する。カテゴリースキーマとは、カテゴリーと成員の関係を図式化したものになる。本稿で考えるカテゴリーは、通常言われるカテゴリーよりも広く、ただ関連するというゆるやかな関係も集合体とみなし、カテゴリーとする^{*1}。そのため、使役者や被使役者、ひいては被使役事象もカテゴリーとして扱っていく。使役者というカテゴリーに、目的語と動詞の原形で表される被使役事象が〈出現〉し、成員として存在するとみなしていく。

2. 使役文と意味のネットワーク

本稿は迂言的使役構文のネットワークも併せて考察する。ネットワークには3つある。1つは、一つの単語が持つ多義性のネットワーク(NW1)がある。語が持つ複数の意味は、互いに関連付いている。迂言的使役動詞もまた、各々独自のネットワーク(NW1)を持っている。2つめに、使役文は、構文自体のネットワーク(NW2)を持つ。使役文であれば、用いる動詞が異なってい

ても、互いに関連がある。3つめは、使役文と他構文とのネットワーク(NW3)がある。

本稿ではネットワークすべてを詳細にできないが、いくつか示していく。NW2で言えば、迂言的使役構文はすべて、〈出現〉と強く関連付いている。被使役事象またはその一部が〈出現〉することに、使役者が関わることを示す文が、迂言的使役構文だからである。そのため迂言的使役構文は、〈出現〉をもとに、ネットワーク(NW2)をなすとみなしていく。

ネットワーク(NW3)ではまず、〈出現〉は〈存在〉と強く結びついている。〈出現〉は、出現することで結果として存在することを表すからである。つまるところ、どちらも存在を表している。そのため存在を表す there 構文では、存在を表す動詞と、出現を表す動詞が生じる。(1)は存在で、(2)は出現を表している(例は鈴木・安井(1994: 150))*²。〈存在〉と〈出現〉が近い関係にあることが分かる。

(1) 存在の動詞(verb of existence): dwell, exist, hang, lie, live, remain, reside, stand, survive, etc.

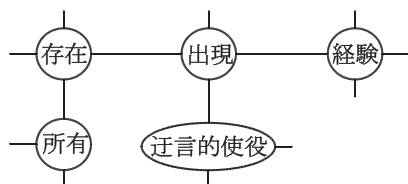
- a. There exist several alternatives. b. At the edge of the forest there lived an old man.

(2) 出現の動詞(verb of appearance): appear, arise, begin, burst, develop, emerge, ensue, follow, grow, happen, loom, occur, open, return, spring up, take place, etc.

- a. There arose a conflict. b. There ensued a dispute.

さらに〈存在〉は〈所有〉と関連する。というのも〈所有〉は、所有者のところに何かが、存在することを表すからである。このように関連する意味は、構文間でネットワークとして結びついており、互いに関連付いていると言える。図示したものが、(3)になる。ネットワークとしては不完全であるが、迂言的使役のネットワーク(NW3)の一部を示す。

(3)



最後にNW1(語彙の多義性)であるが、これも(3)のネットワークを共有している。例えば、have は〈存在〉〈所有〉、そして〈出現〉を媒介して〈迂言的使役〉、〈経験〉の意味を持つ。make は〈出現〉と〈迂言的使役〉の意味を持つ。let, get, cause は本稿では詳しく論じないが、どれも〈出現〉を媒介して〈迂言的使役〉の意味を持っている。意味の多義性は、メタファーやメトニミーを通して論じられることが多いが、本稿の考えでは(3)のようなネットワークを介在して意味が広がる側面に着目する。つまり本稿では、意味の広がり動機付けの一つに、カテゴリースキーマのネットワークがあると考える。カテゴリースキーマを表示することで、互いに関連性が見えてくる。

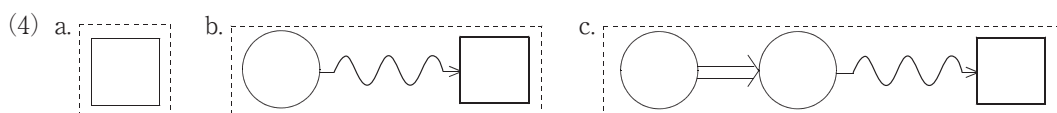
典型的には、使役者カテゴリーに、被使役事象が〈出現〉することを表す文が、迂言的使役構文になる。迂言的使役構文は、使役者が[場所]、被使役事象が[モノ]となり、[場所]に[モノ]が〈出現〉し、成員として〈存在〉することを示している。〈迂言的使役〉と〈存在〉との結びつけは、カテゴリースキーマを用いて初めてとらえることができると考える*³。

3. 使役文とカテゴリースキーマ

使役には語彙的使役と迂言的使役がある。語彙的使役とは、1つの動詞の中に使役の意味と、結果として生じる事象を併せ持つ使役他動詞で表現されるものになる。一方迂言的使役は、make, have, get などの使役動詞を使い、結果として生じる事象を to 不定詞や原形不定詞で表現する。生成意味論において、語彙的使役を迂言的使役から変形規則で派生させる試みがなされたが、Fodor(1970)をはじめ異を唱える意見が出た(cf. G. Lakoff 1965, Fodor 1970, Shibatani 1976, Lemmens 1988, etc.)。本稿でも語彙的使役と関連づけて、迂言的使役を論じることはいない。

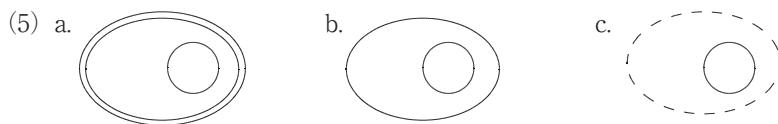
語彙的使役と迂言的使役の違いの一つとして、使役における、原因事象(使役事象)と結果事象(被使役事象)の関係がある。この2つの事象を単一と見るか、別のものと見るかで、言語的ふるまいが異なる。迂言的使役では、2つの事象が独立して存在しており、使役者からの被使役事象への関わりは間接的である。一方語彙的使役では、2つの事象は単一のものと見なされ、使役者から事象へ直接的関わりをする。

本稿ではこの違いを深く扱わずに、迂言的使役構文に集中する。ここで使役文の表記について考察したい。中村(1993: 249)は、状態を(4a)、変化を(4b)、使役を(4c)と表記している。破線の四角は認知スコープ、○は参与者、□は結果状態/結果位置、二重矢印はエネルギー伝達、波線矢印は状態変化/位置変化を表している。



(4c)では、使役者が被使役者に働きかけ、その結果が生じている。しかしこのスキーマでは、迂言的使役動詞の違いに対応しにくい。let 使役文で言えば、使役者は被使役事象に働きかけるのではなく、許容とか放置しているに過ぎない。また、自発使役などを扱いにくい。

そこで本稿ではカテゴリースキーマによる表記を提案する。カテゴリースキーマでは、使役者がカテゴリーとなり、使役者に関わる事柄が成員となる。ゆるやかな集合体ではあるが、使役者をカテゴリーと見なす。このとき、使役者と被使役事象は、単に関わることを表す^{*4}。カテゴリーと成員の関わり方には、3つある。これらはカテゴリーと成員の緊密度の違いを表す。



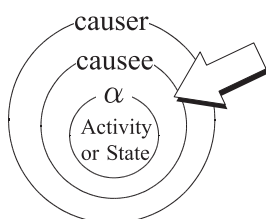
(5a)は緊密度が高く、成員への関わりが強い。使役動詞 make, get がこのパターンをとる。(5b)は緊密度が普通で、成員への関わりもさほど強くない。使役動詞 cause がこのパターンになる。(5c)は緊密度が弱く、成員への関わりも弱い。使役動詞 have, let がこのパターンになる。

さらにカテゴリースキーマを用いると、使役文が〈出現〉に関わることを表記しやすい。まず〈出現〉するのは被使役事象全体とは限らない。get 使役文では、被使役者に働きかけ、被使役事象

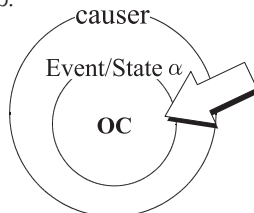
の一部(非特定の[活動][状態](Activity/State))が〈出現〉する。〈出現〉するのは、被使役事象全体の場合と、被使役事象の一部の場合がある。スキーマ上で、〈出現〉するものに矢印表記することで、何が〈出現〉するのかを示すことが可能となる。

また使役文の被使役事象は、大きく2つに分けられる。被使役者が前面に出る場合と、出ない場合がある。被使役者が前面に出る場合、被使役者カテゴリーが立ち上がる。そして被使役者カテゴリーの中に、非特定の[活動][状態](Activity/State)が成員として含まれる。スキーマは(6a)になる。一方被使役者が前面に出ない場合、積極的な参与者とはならず、意識されない。例えば自発使役では、何もしなくても自発的に事象が生起する。このとき被使役者は、積極的参与者とはならず、さして意識されない。このときスキーマは(6b)となる。矢印は〈出現〉を意味する。

(6) a.



b.

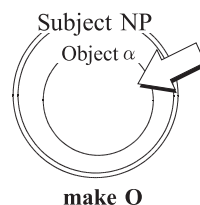


(6a)では使役者は、被使役者に働きかけ、被使役事象が〈出現〉する。被使役者は、働きかけの対象になるため、被使役者カテゴリーが立ち上がる。このとき存在構造が2重になっている。一つは、使役者カテゴリーが[場所]、被使役事象が[モノ]として、カテゴリー内に存在する。もう一つは、被使役者カテゴリーが[場所]、非特定の[活動][状態](Activity/State)が[モノ]として存在している。

一方(6b)では使役者は、被使役事象そのものに働きかけ、被使役事象が〈出現〉する。被使役事象に働きかけるので、被使役者カテゴリーは立ち上がらない。使役者カテゴリーが[場所]、被使役事象が[モノ]として〈出現〉し、存在する。結論を先に述べれば、使役動詞 have, get は(6a)パターンのみ、make, cause は(6a)と(6b)の両方のパターン、let は(6b)パターンのみになる。次節以降、迂言的使役動詞を一つずつ見ていくこととする。

4. make

make は、主語 NP が何かの出現に強く関わることを表す。スキーマ (7) は(7)になる(目的語(Object)が出現することを矢印で表記)。細かい意味情報や選択制限は、別途カテゴリー情報として記載されると考える。カテゴリー間及びカテゴリーと成員の関係のみをスキーマ(7)は表している。



make 使役文も(7)を基本形とし、展開された意味になる。通例 make 使役文は、大きくは強制使役と自発使役に分けられる。さらに強制使役は、使役者(主語 NP)が意図を持つ「意図有り

強制使役文」と、意図を持たない「意図なし強制使役文」に分けられる(高見(2011)他)。(8)は意図有り強制使役文、(9)は意図なし強制使役文、(10)は自発使役の例になる。

(8) Mother made us do our homework by threatening to ground us if we didn't.

(9) John made Mary fall down by putting his leg in her way.

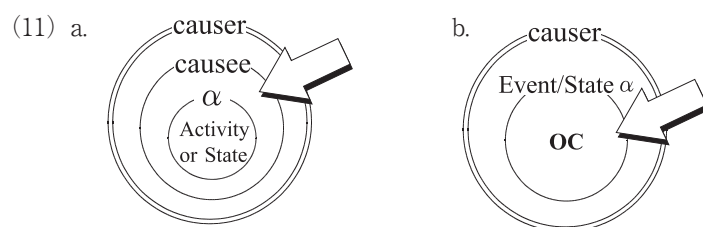
(10) a. Dirt in the gasoline made the car stop.

b. The baby made us all smile.

(高見 2011: 184-187)

(8)では母親が意図的に脅すことで宿題をさせており、(9)では John は転ばしてはいるが、Mary に転ぶように命令したり、強制したわけではない。一方(10a)では無生物主語が、(10b)では人間が使役者となり、無意図的に事象を引き起こす使役文となっている。

しかし本稿は、make 使役文は、3つではなく、(11)に示す2つに分ける*⁵。どちらも使役者カテゴリーの中に、被使役事象が〈出現〉するが、被使役者カテゴリーが現れるかどうかで違いがある。(11a)で使役者は、被使役者に強く働きかけ、被使役事象(被使役者+非特定の[Activity/State])が出現する。一方(11b)で使役者は、被使役事象そのものに働きかけ、特定の被使役事象[Event/State]が〈出現〉する。なお α [Activity/State]は非特定の[活動][状態]をさし、特定の被使役者 causee を含まない。一方、[Event/State α]は特定の被使役者 causee が参与する特定の Event や State とする。(11a)が意図有り強制使役のスキーマで、(11b)は自発使役と意図なし強制使役のスキーマになる。



まず意図的強制使役(11a)から見る。意図的に被使役事象を出現させるとは、意図的でなければ被使役事象が出現しないことを意味する。つまり使役者が存在するだけでは、被使役事象は〈出現〉しない。被使役者の力が必要になる。使役者は、被使役者に働きかけて初めて、被使役事象を〈出現〉させることができる。そのため(11a)では、被使役者カテゴリーが現れる。使役者が、被使役者に働きかけて、被使役事象を〈出現〉させる。このとき被使役事象は、被使役者カテゴリー内に、非特定の[活動][状態](Activity/State)を内包すると表記していく。

一方意図なし強制使役と自発使役には、使役者の意図的行為がない。意図がなくても、被使役事象が出現するからである。使役者は直接、被使役事象に働きかけ、被使役事象を出現させると考えられる。これを示したのが、(11b)になる。被使役事象は、被使役者が関わる特定の[出来事][状態](Event/State)になる。

つまり使役者の意図性の有無で、カテゴリースキーマが異なる。意図性があれば被使役者カテゴリーが生じ、なければ現れない。しかしどちらのスキーマも(7)の構造を継承している。つまり make は何かの出現に強い働きかけを行っている。

そのため、いずれのスキーマにも適合しないものは非文となる。まず〈出現〉に強く関与できないものは非文である。(12)では、秘書は教授に依頼するのみで、被使役事象の〈出現〉に強く関わることはない。(11a)と矛盾するため、非文となる。

(12) Student: I need Professor Smith's signature on this application.

Secretary: All right. *I'll make him sign it and give it back to you tomorrow morning.

(久野・高見 2007: 240)

次に被使役者が望む事象に、make 使役文を用いると非文または不自然になる。make 使役文は、使役者の強い関与があって初めて、被使役事象が〈出現〉する。そのため強い関与がいない状況、例えば被使役者が望む事象であれば、容認されない。(13a)では彼女が、(13b)では子供達が望んでいるため、不自然な表現になっている。

(13) a. *John made Mary go to France, as she had really wanted to. (久野・高見 2007: 240)

b. ?Every school day morning, Mary made her children leave home in time for school, which they did willingly. (久野・高見 2014: 8)

以上、make + O + 動詞の原形を扱ってきたが、最後に、動詞の原形部分が、[be 動詞 + 形容詞]になっているものと、単に形容詞になっているものを比較したい。

(14) a. He made her be more cautious. b. He made her cautious.

(15) a. *He made her be beautiful. b. He made her beautiful. (久野・高見 2014: 18-21)

(14) (15)a には be 動詞が現れ、(14) (15)b には be 動詞がない。(15)で適格性に違いがでるのは、be 動詞が現れる場合と現れない場合では、その意味が異なるからである。久野・高見(2014)では、(15)a タイプを「被使役者が制御できる事象の言語的強制使役」とし、C(補語)が +self-controllable でなければならないと述べる。実際、*Be beautiful. という命令文になれないことから分かるように、be beautiful は -self-controllable であるため、(15a)は不適格になると説明する。一方(15)b タイプは、魔術的状态変化誘起と自発使役の意味があるとする。魔術的状态変化誘起とは、使役者が被使役者に対して、被使役者が自己制御できない恒常的状态変化を、意図的・強制的・魔術的にもたらすものとする。

(16) a. A plastic surgeon made her beautiful. [魔術的状态変化誘起]

b. He invested her money wisely, and made her rich. [自発使役]

(久野・高見 2014: 21, 25)

(16a)では、整形外科医が、意図的に、被使役者が自己制御できない恒常的状态変化(美しい)をもたらしている。一方(16b)では巧みな投資により、自然と、彼女は裕福になったことを表している。

こうした(15)a タイプと(15)b タイプの違いは、(11)に示す2つのスキーマで説明される。(14)で説明すると、be 動詞が入っている(14a)の場合、be 動詞が入ることで、目的語 her と、[be more cautious]が区切れた感じになる。つまり目的語が前景化され、被使役者カテゴリーが立ち上がる。このときカテゴリースキーマは、(11a)になる。「使役者 He は意図的に、彼女に働きかけ、

より注意深くさせた」という意味になる。一方(14b)の場合、スキーマは(11b)になる。彼にまつわる何かによって、[彼女が注意深くなる]事象が〈出現〉したことを意味する。魔術的状态変化誘起と自発使役に分ける必要はない。というのもスキーマ(11b)は、「意図なし強制使役文」「自発使役」をあわせたものである。意図なし強制使役文が、魔術的状态変化誘起に、自発使役はそのまま自発使役に対応している。そのため(15)aタイプと(15)bタイプの違いは、そのままスキーマの違いと考えることができる。本稿ではこれ以上、動詞の原形以外のものがくる用法を考察しないが、ここでの議論が、動詞の原形以外にも応用できると考える。

5. cause

cause 使役文は、make 使役文同様、(6a)と(6b)の2つのタイプがある。典型的には、cause 使役文は、偶発的で無意図的な使役を表すと言われる(cf. Givon 1975: 61-62)。(17a)では偶発を表す副詞 *accidentally/inadvertently* が現れ適格に、(17b)では意図を表す副詞 *deliberately* が現れ不適格になる。

(17) a. John *accidentally/inadvertently* caused Mary to drop her books.

b. *John *deliberately* caused Mary to do the dishes. (Givon 1975: 61-62)

しかし高見・久野(2014: 156-157)が指摘するように、cause 使役文には使役者が意図的な用例が存在する。(18)では非意図的な *accidentally* だけでなく、意図的な *deliberately* も共起できることから、意図的な読みが可能なが分かる。同様に(19)でも意図を表す副詞 *deliberately/intentionally* が現れており、使役者が意図的であることが分かる((18)(19)は高見・久野(2014: 156-157))。

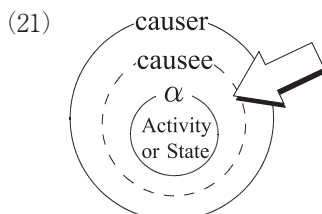
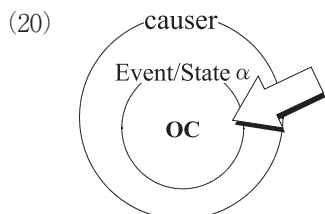
(18) a. John *deliberately* caused the car to crash. [意図的]

b. John *accidentally* caused the car to crash. [非意図的]

(19) a. It could be argued that God *deliberately* caused humans to evolve from lower animals.

b. Microsoft *intentionally* caused Burst's products to be incompatible with Windows software.

つまり cause には自発使役の意味と、強制使役の意味がある。これは make 使役文と並行的であるが、違いもある。スキーマは、(20)が cause の自発的使役、(21)が cause の強制使役になる。



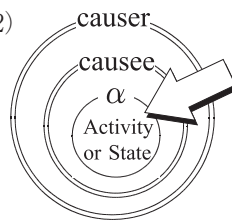
まず(20)であるが、これは make の自発的使役スキーマ(11b)と並行的である。スキーマの違いは、使役者カテゴリーが二重線から一重線になっている。使役者は、make のような強制力は

なく、被使役事象が〈出現〉するための単なる原因にすぎないからである。使役者は、被使役事象に働きかけ、被使役事象を〈出現〉させる。また被使役者においても、被使役事象への関与は薄く、事象自体が自然発生的である(cf. 高見・久野 2014: 166)。言い換えれば、使役者も被使役者も、どちらも被使役事象に意図的に関わらない。そのためこの用法は、偶発的・無意図的事象と呼ばれる。

一方(19)で示すような意図的使役文は、make の意図有り強制使役と並行的である。スキーマは(21)になる。しかし2カ所異なる。一つは使役者カテゴリーは意図的ではあるが、make のような強制力がないため、一重線になっている。また(20)と違い、使役者は被使役者に働きかけて、被使役事象を〈出現〉させる。そのため(20)にない被使役者カテゴリーが、(21)には現れる。弱いながらも使役対象として、参与している。二つめは被使役者が[Activity/State]への関わりが弱い。被使役者は、被使役事象を制御できず(cf. 高見・久野 2014: 166)、いわばなすがままの状態にある。よって破線で表記されている。cause 使役文は、スキーマの観点からは並行的ではあるが、make 使役文では(6a)タイプが基本的意味であり、使役者が成員と強い関わりを持つ(二重線で表記)。一方 cause 使役文は(6b)タイプが標準であり、使役者は make ほど強く関わるわけではない(一重線で表記)。

6. get

get 使役文には、(6a)タイプのみがある。使役者が、抵抗する被使役者に、説得など苦労して働きかけ、何かをさせる構文になる。スキーマは(22)になる。使役者は、被使役者に直接働きかけ、非特定の[活動][状態](Activity/State)が〈出現〉する*⁶。使役者も被使役者も、各々の成員への関わりが強いので二重線となっている。使役者だけで被使役事象そのものを引き起こす力はなく、被使役者も事象に大きく関わる。そのため、二重線のカテゴリーが、2つある。



また〈出現〉するのが被使役事象全体ではなく、非特定の[活動][状態](Activity/State)だけになる。被使役者がすでに存在していることが前提になっているからである。被使役者は、はじめから存在し、被使役者が抵抗する活動や状態が新たに〈出現〉することを、get 使役文は表すのである。

そのため使役者からの働きかけが不要な事象、強くいらぬ事象は非文となる。具体的には、(23)のように被使役者が希望していたり、自然にそうなる事象は認められない。同様に(24)のように、苦労せずに生じる事象には用いられない((23)(24)はどちらも久野・高見(2007: 253))。

(23) a. *The lightning got the little girls to cover their heads.

b. *John got Mary to go to France, as she had really wanted to.

(24) Student: I need Professor Smith's signature on this application.

Secretary: All right. ??/*I'll get him to sign it and give it back to you tomorrow morning.

(23a)では少女が頭を覆うのは自発的に起こることであり、(23b)ではメアリーは望んでフランスに行く。(23)では、事象が自発的または希望することであるため、使役者の関わりが(22)と矛盾する。(24)も同様に、教授が学生の申込み用紙にサインをするのは当然のことである。使役者である秘書の関わりは強くない。そのため使役者が二重線の(22)と矛盾する。

なお被使役者が無生物の(25)のような例がある。(22)では単に、被使役者が[Activity/State]に対して、強く関与することを示しているにすぎない(二重線で表記)。被使役者が意図的である必要もなく、人間である必要もない。そのため(25)のように被使役者が無生物であっても、[Activity/State]に対して強い関与があれば適格となる。

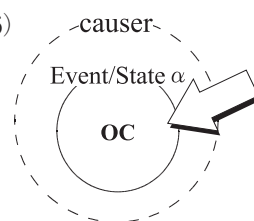
(25) a. After working at it for over two hours, they finally got the vault to open.

b. He couldn't get the heavy chair to budge. (久野・高見 2007: 254)

(25a)では、金庫室の特性が開くかどうかに関与しており、(25b)でも重い椅子の特性が、椅子が動くかどうかに関与する。そのため(22)と矛盾せず、適格となる。よって被使役者は、無生物かどうかは関係ない。

7. let

let 使役文には、(6b)タイプのみがある。被使役事象の〈出現〉に、(26) 使役者が緩く関わる(スキーマ(26)で破線で表示)。使役者が関与しなくとも、自然にそうなる現象の〈出現〉を、使役者が許容または放置する。このとき被使役者は、事象の〈出現〉に対して、抵抗することなく、希望していることさえある。被使役者は積極的参加者ではないため、被使役者カテゴリーは立ち上がらない。自然発生的事象のため、使役者の事象への関わりは弱い。そのため、使役者は無生物であってもよい。



(27) a. John always lets Mary do as she likes.

b. If you are interested in that scholarship, I'll let you know more in detail.

c. Mary inadvertently let the flowers droop. (久野・高見 2007: 265-266)

(27a)ではMaryが、(27b)では聞き手が望むことを許容しており、被使役事象は自然発生的事象である。(27c)でも無生物のthe flowersが花がしおれる事象を、放置したことを表現しており、自然発生的事象になる。そのため(26)のスキーマと合致し、適格文となる。

従って自然にそうならない現象、例えば、「被使役者が「抵抗」する事象や、使役者が強制、説得、指示したり、苦勞／努力して引き起こす事象」に用いられることはない(cf. 久野・高見 2007: 268)。(28)のような例文がある。

(28) a. *The lightning let the little girls cover their heads.

b. *I let him wash my car, though he didn't seem to want to.

c. Student: I need Professor Smith's signature on this application.

Secretary: All right. *I'll let him sign it and give it back to you tomorrow morning.

(久野・高見 2007: 266)

(28a)では稲妻が、(28b)では「私」が被使役事象の〈出現〉に強く関与しており、非文となる。(28c)では教授がサインをするということは自発的に発生しているわけではない。そのため被使役事象は使役者の積極的な関与が必要である。そのため非文となる。let 使役文は、被使役事象の〈出現〉に弱く関わることを示す構文であり、カテゴリースキーマは(6b)タイプのみとなる。

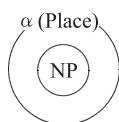
8. have

使役動詞 have は、被使役者カテゴリーが現れるカテゴリースキーマ(6a)のみを持つ。まず have 使役文に入る前に、have の全体像を示したい。緒方(2016)では、have の多義性を考察した。それを一部修正しながら概観する。

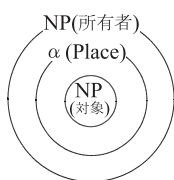
最初に have の基本的意味、所有から考察する。所有とは、所有者のところにモノが(抽象的な意味で)存在することに、所有者が関与していること(権利を持っていること)を意味する。つまり所有は、存在の意味を内包している。存在を(29a)で表せば、所有は(29b)のように存在を含み込む構造をしている。(29a)では、場所がカテゴリー α となり、その成員としてモノ(NP)を含み持つ。(29b)では、場所 α (所有者)にモノ(NP)が存在し、その存在に所有者自身が関わっている。所有者カテゴリーと、場所カテゴリー α は同一指標で結ばれており、どちらも主語 NP になる*7。

しかし have は所有だけではなく、様々な意味があり、have 自身の意味は無色に近いと言われている。ここでは have は単に「関わる」という意味を持つと考え、(30)をカテゴリースキーマとする。(30)では、抽象的な意味での場所カテゴリー(α (Place))の中に、成員(Obj NP)が存在することに、主語 NP カテゴリー(Sbj NP)が関わることを示している*8。

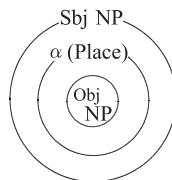
(29) a.



b.

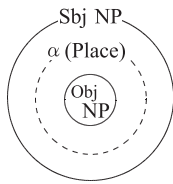


(30)

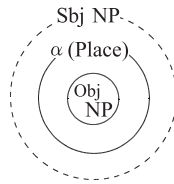


この(30)は、成員とカテゴリーの緊密度によって、大きく2つに分けられる。一つは(31a)タイプで、主語カテゴリー(関与)の意味が相対的に強くなっている。(31a)タイプの代表が所有であることから、このタイプを所有のスキーマと呼ぶ。もう一つは(31b)タイプで、場所カテゴリー(存在)の意味が相対的に強くなっている。(31b)タイプはそのまま存在のスキーマと呼ぶ。

(31) a. 所有のスキーマ



b. 存在のスキーマ



まず所有のスキーマから見る。ここに含まれる意味として、(32)のようなものがある((32)(33)(34)は一條(2012: 178), Ritter and Rosen(1993: 296, 309)から引用)。

- (32) a. John has two cars. [具体物所有] d. John has a sister. [人間関係]
 b. John has no mercy. [抽象物所有] e. John has blue eyes. [固有の特性]
 c. This table has four legs. [全体一部分]

(32a)は具象物の所有になる。この所有は、譲渡可能である(alienable possession)。(32b)は、目的語が抽象物で、それを所有する。(32c)は、主語が全体、目的語が部分という関係になっている。(32d)は、主語が、目的語で表される人間関係の対象(人)がいることを表す。(32e)では、目的語が、主語の固有の特性を表している。この特性は譲渡できない(inalienable possession)。いずれも存在というより、主語 NP が存在に関わることを示している。

次に(31b)の存在のスキーマを見る。ここでは緒方(2016)を修正する。存在のスキーマは、大きく2つに分けられる。一つは、対象が単に存在することを意味する(〈存在〉と呼ぶ)。もう一つは、移動して来たり、出現することで、その場所に存在するようになったという意味がある(〈出現〉と呼ぶ)。(33)が〈存在〉で、(34)が〈出現〉の意味になる。

- (33) a. John had a party. [出来事名詞] c. He has a gun with him. [所持]
 b. The table has a book on it. [空間的近接関係]
 (34) a. John had the students read three articles. [使役]
 b. John had his car stolen. [経験]

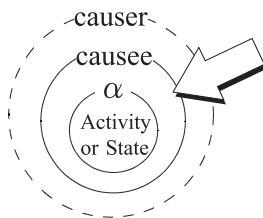
(33a)では、出来事名詞が目的語にくる。(33b,c)はいずれも偶発的な位置関係を表している(cf. 一條 2012: 178)。(33b)は、主語が無生物で空間的近接を表す。(33c)は、主語が有性物で、所持していることを表している。次に(34a)は迂言的使役構文である。また(34b)は主語が Experiencer になる構文になる*9。目的語の後ろに形容詞、過去分詞、現在分詞、はだか不定詞が現れることができる。

〈存在〉(33a,b,c)では、存在物はもとから場所カテゴリーとに存在しており、その事を表現している。一方〈出現〉(34a,b)では、存在事象([the students read three articles][his car stolen])が新たに出現したことを表現している。使役でも経験でも同じく、そうした事象が〈出現〉したことを表現する。

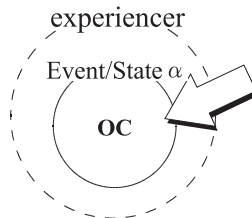
〈存在〉のスキーマは(31b)である。(31b)では、場所(抽象的な意味での主語)に目的語が存在することに、主語カテゴリーが関わっていることを示している。積極的に関わっていることを示すのではなく、存在していることを示す。そのため関わりが弱くなっている。

一方〈出現〉のスキーマは(35)になる。(35a)が使役文のスキーマで、(35b)が経験文のスキーマになる。(35a)は、存在のスキーマ(31b)に〈出現〉の矢印が付いた(36)から派生したものになる。(35a)は、単に(36)のラベルが置き換わっている。主語カテゴリーが使役者カテゴリーに、場所カテゴリーが被使役者カテゴリーに、成員が α [Activity or State]に、(35a)でなっている。一方(35b)は、経験のスキーマになる。経験者カテゴリーに、特定の[出来事][状態](Event/State)が〈出現〉することを表している。make 使役文では、(35a,b)タイプはどちらも使役の意味であったが、have の場合、使役は(35a)タイプのみになる。

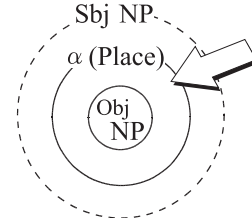
(35) a. have 使役文



b. have 経験文



(36)



(35a)の have 使役文では、使役者に強制力がないため、被使役者が抵抗を示すような場合、不適格となる(例は(37))。また被使役者が望んでいる場合、事象は自発的に生起する。これは(35b)のスキーマに相当する用法だが、have 使役文にこのタイプはない。そのため(38)のように被使役者が望んでいた、自然発生的な事象では不適格となる。同様に(39)が非文なもの、スキーマとして(35b)に相当する事例であり、使役者が被使役事象に働きかける用法が、have 使役文にないからである。

(37) *Mary had her husband stop drinking. (高見 2011: 211)

(38) a. *John always has Mary do as she likes. (高見 2011: 212)

b. *Mary inadvertently had the flowers droop. (久野・高見 2007: 223)

(39) a. *Lou had Charlie shudder. b. *Lou had Charlie slip. c. *Lou had the lamp fall.
(Belvin 1993: 31)

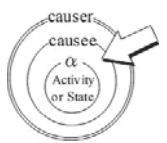
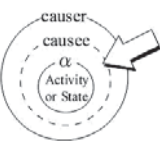
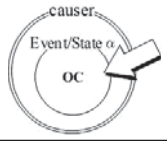
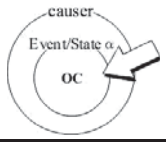
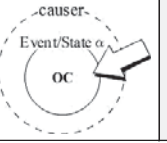
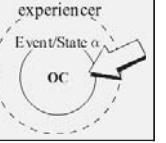
Have の多義性(ネットワーク(NW1))は、(3)に示すようなネットワークのつながりで成立する。Have では、〈存在〉〈出現〉〈迂言的使役〉さらには、〈出現〉を通じた〈経験〉の意味を持つ。使役文の意味においては、他の使役文同様、〈出現〉の意味を内包していることが分かる(ネットワーク(NW2))。他構文とのネットワークは、存在文や所有文との関連までしか明らかにできないが、もっと多岐の広がりがあると思われる。これについては今後の課題となる。

9. まとめ

本稿では、迂言的使役構文をカテゴリースキーマの観点から考察した。カテゴリースキーマによって、使役文が互に関連付いていることを示した。具体的には、存在構造を中心に使役文はネットワークをなしている。存在には、〈存在〉と〈出現〉がある。make, cause, have, get, let すべ

てにおいて、迂言的使役構文では、被使役事象またはその一部が〈出現〉することを表す。このときスキーマは、(6)に示す2つを基本とした。一つは、被使役者カテゴリーが現れ、被使役者カテゴリー内に非特定の[Activity/State]を含み込む(6a)タイプであった。もう一つは、被使役者カテゴリーが現れずに、被使役事象が特定の[Event/State]になっている(6b)タイプになる。どのタイプをとるかを、(40)に表としてまとめる。

(40)

	make	cause	get	let	have
(6a) タイプ					
(6b) タイプ					

make, cause は両方のタイプがある。make の(6a)タイプ、cause の(6b)タイプが、太枠になっているのは、太枠が標準の意味であることを示している。let は(6b)タイプのみ、get, have は(6a)タイプのみになる。have には(6b)タイプがあるが、これは使役ではなく、経験の意味になる。have に(6b)タイプの使役がないのは、let に(6b)タイプの同じカテゴリースキーマが存在しているからと考えられる。(40)のスキーマから分かるように、本稿ではカテゴリーと成員の緊密度を、二重線、一重線、破線で示し、その特性を表した。

本稿で考えるカテゴリーは、図と地をもとにした背景化・前景化により他と区別される集合体である。この図地現象は、様々な言語事象の説明で中心的な働きをなすと考えており、カテゴリースキーマを通して、より簡潔に説明が可能になると考えている。また意味のネットワークは、カテゴリースキーマを通して形成されている一面があると考え。本稿ではネットワークすべてを扱うことはできなかったが、今後の課題としたい。また迂言的使役構文の受身文についても扱っていない。これも別稿にゆずることとしたい。

注

- *1 本稿のカテゴリーは、図と地をもとに定まる。図の部分前景化させるか、地の部分を背景化させるかによって、カテゴリーは定まると考える。図と地は、人間の認知の根本をなしており、広範囲な言語事象を説明する可能性を持っている。
- *2 鈴木・安井(1994: 150)では存在、出現の動詞に加え、移動動詞(verb of motion): approach, arrive, come, enter, fly, go, run, tread, walk, etc.も現れるとする。しかし移動動詞も、移動した後存在するようになったという意味であるため、出現動詞の中に含めることとする。ちなみに消滅を表す動詞(die, disappear, etc.)は、存在文に生じない。存在を表さないためと考えられる。

- *3 使役文のネットワークには、知覚動詞構文や他の小節構造が関わってくると予測される。
- *4 細かい意味の情報は、カテゴリ情報として記載されており、カテゴリースキーマでは表記しない。
 カテゴリ情報には、意味情報に加え、選択制限なども含まれると考える。
- *5 3つではなく2つに分ける理由は、観点の違いである。3分類では、強制か自発か、意図の有無で分類されている。しかし本稿は make 自体に強制か自発かの分類はなく、成員に対しての働きかけという観点では、区別しない。何に対して働きかけるのか、被使役者が意識されるかどうかで分類している。結果、2分類になっている。この分類は、迂言的使役構文に共通する。
- *6 使役構文 get の場合、傾向として補語には状態は来ない。しかしこの情報は、カテゴリ情報として別に記載されることとし、カテゴリースキーマでは、一般化のため(Activity/State)と列記する。
 i) *I got him to [know French / like French cooking]. (奥田 1997: 10)
- *7 現実の場所が追加されることもある。この場合、場所カテゴリーは複数存在する。一つは、抽象的な意味での場所カテゴリー(所有者自身)、もう一つは現実空間上の場所カテゴリー(文字通りの場所)になる。さらには、賃貸関係が働いている場合には、それにもう一つ抽象的な場所カテゴリー(賃借人)が加わる。このように同種のカテゴリーは必ずしも一つに限定されることはなく、状況に応じて、追加されていく。
- *8 実際の場所が文の中に現れる場合、場所カテゴリーがもう一つ追加される。
 i) His daughter had a glass of wine in her hand and a smile on her face.
- *9 have の経験には、好ましくない事象「被害・迷惑」と、好ましい事象「利益・恩恵」があるが、好ましいか好ましくないかは語用論的に決まるので、カテゴリースキーマには反映されない。(cf. 久野・高見 2007, 高見 2011)

参考文献

- Baron, N. S. (1974) "The structure of English causatives," *Lingua*, 33(4), 299-342.
- Belvin, R. S. (1993) "The two causative *haves* are the two possessive *haves*," in *MIT working papers in linguistics*, 20., eds., V. Lindblad and M. Gamon, 19-34. Cambridge MA: Department of Linguistics, MIT.
- Conreras, H. (1995) "Small Clauses and Complex Predicates," In *Syntax and Semantics 28: Small Clauses*. eds., A. Cardinaletti and M. T. Guasti, 135-152. New York: Academic Press.
- Fodor, J. A. (1970) "Three Reasons for Not Deriving "Kill" from "Cause to Die"," *Linguistic Inquiry*, 1(4), 429-438
- Givón, T. (1975) *Cause and control: On the semantics of inter-personal manipulation*. In Kimball, J. ed, *Syntax and Semantics 4*. New York: Academic Press.
- Goldsmith, J. (1984) "Causative Verbs in English," In *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*. eds., D. Testen, V. Mishra, and J. Drogo, 117-130. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 一條祐哉(2012)「英語の have 所有構文の意味の連続性」『日本認知言語学会論文集12』, 178-189.

- 岩本弘道(2001)「小節の内部構造について」『神奈川工科大学研究報告. A 人文社会科学編25』, 43-55.
- Kimball, J. (1973) "The grammar of existence," *Papers from the Ninth Regional Meeting*, Chicago Linguistics Society, 262-270.
- 久野暲・高見健一(2007)『英語の構文とその意味』開拓社.
- 久野暲・高見健一(2014)『謎解きの英文法：使役』くろしお出版.
- Lakoff, G. (1965) *On the Nature of Syntactic Irregularity*, Doctoral dissertation, Indiana University.
- Lemmens, M. (1998) *Lexical perspectives on transitivity and ergativity: causative constructions in English* (Vol.166) John Benjamins Publishing.
- 中村芳久(1993)「構文の認知構造ネットワーク」福岡言語学研究会編『言語学からの眺望』, 247-268.
- 緒方隆文(2016)「存在と所有－カテゴリー分析－」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要11』, 29-41.
- 奥田雅信(1997)「英語の迂言的使役構文に関する認知的分析」, *Osaka Literary Review* 35, 1-15.
- Ritter, E., and Rosen, S. T. (1997) "The function of have," *Lingua*, 101, 295-321.
- Shibatani, M. (1976) "The grammar of causative constructions: A conspectus," *Syntax and semantics 6: The grammar of causative constructions*, ed. M. Shibatani, 1-40. New York: Academic Press.
- 鈴木英一・安井泉(1994)『現代の英文法 第8巻 動詞』研究社.
- 高見健一(2011)『受身と使役—その意味規則を探る』開拓社.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

迂言的使役構文とカテゴリー

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Periphrastic Causative Constructions

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学
人 間 文 化 研 究 所 年 報
第27号
2016年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 27
2016